

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2015年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 コミュニティ福祉学 専攻		
指導教員	所属・職名		氏名
	立教大学・教授		松尾哲矢
研究課題名	学校運動部の過度な競技志向に陥る要因に関する研究 - 学校運動部の指導者の養成過程に着目して		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・2年		金子琴美
研究期間	2015年度		
研究経費	100千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

運動部指導者の研究では、勝利至上主義に代表されるような過度な競技志向の問題点が指摘され、その要因として運動部指導者の指導の在り方、指導能力等に関する研究が散見されるが、誰が運動部指導を担うのか、どのようにして運動部指導者になっていくかという指導者の養成過程に着目した研究は少ないことが看取された。

そこで、本研究では、大学期における「教員養成課程」の実証的調査と「教員としての就職以後」の高等学校バスケットボール部の指導者を対象にインタビュー調査を行い、主に役割論と社会化論に依拠しながら、指導者が「競技志向」に傾倒してしまう過程とその要因を探究した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[運動部指導者] [指導意識] [競技志向]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

【研究結果】

(1) 大学期における「教員養成課程」の調査

調査 1 では、4 大学の教員養成課程を検討した (12 大学に調査を依頼・実施を行ったが、不備なく調査できた大学は 4 大学に限られた)。

学習指導要領の歴史的変遷に基づいた部活動のあり方と関連させて調査したが、学習指導要領上、部活動の位置づけが曖昧なまま活動自体が行われてきているため、大学の教員養成課程においても部活動指導は周辺化されており、結果として、教員養成課程において、部活動指導は十分に学ばれることなく、学校現場において運動部活動を指導しているという状況にあることが看取された。ここから、運動部指導者になる前の指導者としての役割は指導者個人の運動部経験やスポーツ経験にゆだねられていると考えられる。加えて、運動部経験やスポーツ経験が比較的少ないまま教員として運動部指導を行う指導者もいるため、このような指導者にとって、指導者として活動していく過程が指導者の役割獲得にとって大きな影響を与えられられる。

(2) 運動部活動における「教員としての就職以後」の調査

調査 2 では、高等学校バスケットボール指導者 15 名にインタビュー調査を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析を進めた。その結果、9 つの概念が生成され、そこから【1. 残像作用にとらわれる教員】、【2. 勝つことが教育の前提となる部活動】、【3. 指導者間のインフォーマルネットワークの形成】、【4. 保護者の介入よってたじろぐ指導者】の 4 つサブカテゴリー、そして『勝利を強いられる指導者』といった 1 つカテゴリーが抽出された。以下、詳細に検討する。

1. 残像作用にとらわれる教員

・「特に新しい学校になったばかりでできるやつがこれまでいろいろ指導されてきて、やっぱ俺よりきっと知識はもっているんだらうなっていう生徒が (俺が) 何か言ったときに、それはダメなんじゃないかとボソッといたりする」(D 氏)

・「(今回) 転勤した先がバスケットボールがそこまで強いチームじゃないんですけど、例えば、状況がすごい幸運なのは、『強い高校から先生がきた。』っていうような見方を彼らがしてくれた」(C 氏)

以上の発言より、<①生徒の期待のフィルターに作用される教員>、<②勝利に必要な教員を求める生徒>という概念が生成された。D 氏は、前任者の教員がバスケットの専門家で優れた指導方法を提供していた場合、転勤してきた教員も自然とその指導方法を強制されてしまう状況に陥ることを示している。C 氏は前任校が競技レベルの高い高校であったため、生徒の教員に対する期待が高く、指導がやりやすい状況であることを示唆している。両者において、「勝利」を強いられる環境におかれている点があげられる。

勝ちにこだわるかという質問に対しては、

・「ある程度、自分のところにきてくれた生徒の能力と練習とかをみてこれぐらいは勝ちたいなっていうのができあがってきます」(A 氏)

・「チームと生徒に合わせます」(B 氏)

以上の発言から<③生徒・学校のレベルに作用される教員>という概念が生成された。<①>、<②>、<③>より、【1. 残像作用にとらわれる教員】というサブカテゴリーが抽出された。つまり、教員が残っていく教員像及び部活動像によって部活動指導をする教員自身が作用され、その作用に対応しようと必死になってしまうということである。

2. 勝つことが教育の前提となる部活動

・「バスケットを教えられないから生徒指導もあまりうまくいかない」(A 氏)

・「最終的には結果が (ついて) こないと選手自身も納得しないような気がします」(D 氏)

以上の発言から<④生徒指導としての部活動>という概念が生成された。<④>に加え、<②勝利に必要な教員を求める生徒>より【2 勝つことが教育の前提となる部活動】というサブカテゴリーが抽出された。つまり、学校教員が生徒指導を始め、教育を行う前提として部活動においては「勝つ」ことが求められる様相が看取された。

3. 指導者間のインフォーマルネットワークの形成

部活動指導についてどのように情報を得るのかという質問をしたところ、全ての指導者が大会や合同練習、練習試合等で指導情報を得ていると回答していた。ここから<⑤再生産される指導者>、<⑥つながりを求める指導者>という概念が生成された。

研究成果の概要 つづき

- ・「お互いに顧問同士もお互いに細かいところまで、こうだこうだとかはいかない。やっぱ秘密の部分があるので、(特に対戦するようになるほど、相手は) 全然シャットアウトしてくる」(D氏)
- ・「あんまり教えてくれない」(L氏)
- ・「素人だからみんな優しく教えてくれるので、最初は」(F氏)
- ・「わたしバスケわからないですって話をしたときにうちにおいてよってくださった先生がいっぱいいて・・・」(G氏)

という発言からは<⑦素人には寛大な指導者たち>という概念が生成された。以上、<⑤>、<⑥>、<⑦>、<⑧>の概念から【3. 指導者間のインフォーマルネットワークの形成】というサブカテゴリーが抽出された。これは、指導者のインフォーマルネットワークといった重要な他者が介在し、指導情報を得る過程で競技志向し、強くなるとさらに強い集団の中に入るなど、ネットワークの階層化とそれに伴い、競技志向が強まることを示す結果ともいえよう。

4. 保護者の介入にたじろぐ指導者

- ・「そこ(保護者の期待)に関しては絶対に応えなくてはならないなと思っていて、そこにはもう死に物狂いでがんばったじゃないですけど・・・」(C氏)
- ・「今の学校(私立)きたら余計(保護者の期待)がある。ぼろくそ言われるし、今は勝っているからいいけど・・・」(K氏)
- ・「親御さんたちの気持ちとか自分の実力以上のものを期待されていて、非常に厳しいなって思う時はあります」(H氏)

以上の発言から<⑨勝ちにこだわる保護者たち>という概念が生成された。この<⑨>に加え、<③生徒・学校のレベルに作用される教員>の2つの概念から【4. 保護者の介入によってたじろぐ指導者】というサブカテゴリーが抽出された。ここから、学校の競技レベルが高くなるにしたがって、保護者の「勝利」への期待が高まるなど指導者の指導役割に対する役割期待が拡大し、自分に課された期待に対応しようと勝利求める指導者という役割行動をとらざるを得ない様相が看取された。

前述した4つのサブカテゴリーから『勝利を強いられる指導者』という1つのカテゴリーが抽出された。指導者は、教員が残していく教員像および部活動像によって部活動指導をする教員自身が作用され、その反応に対応しようと必死になってしまうこと、学校教員として教育をしていく前提として部活動で勝つことが必要となってくること、指導者のインフォーマルネットワークにおいて指導情報を得る過程で競技志向が高まること、学校の競技レベルが高くなるにしたがって、保護者の「勝利」への高まりに対応せざるを得ないこと、等の様相が明らかとなり、その要因から競技志向へと傾倒してしまうことが看取された。

(3) 総括

以上の結果から、指導者は、教員養成課程において部活動指導を十分に学ばないまま、指導者として現場に入り、活動していく過程で「役割観念」が明確化されていない指導者は、指導者インフォーマルネットワークといった「重要な他者」や生徒・学校の競技レベルや生徒・保護者の期待といった「社会化の状況」の影響により「役割期待」が「役割観念」を上回り、「役割期待」に沿った「役割行動」を起こすことが示唆された。つまり、指導当初、競技志向を有していない指導者でも競技志向化せざるを得ず、競技志向を有している指導者はより競技志向へと傾倒していく構造が構築されていることが看取された。

【展望・課題】

本研究において、学校運動部指導者の指導意識の形成過程の要因を探求し、指導者が競技志向に傾倒していく要因を一定程度明らかにすることができた。しかしながら、本研究の限界として、競技種目を限定したことや競技レベルの範囲を限定しなかった点が挙げられることから、今後は多項目にわたった指導者やトップレベルの指導者を調査対象として研究を検討することが必要であろう。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④その他

平成 27 年 8 月 25 日～27 日に行われた日本体育学会第 66 回大会 (於：国士館大学世田谷キャンパス) に参加し、口頭発表を実施した。

演題「学校運動部指導者における指導意識の形成過程に関する研究」において、日本体育学会第 66 回大会組織委員会より、「若手研究奨励賞」を受賞した。